おんがく広場

♪ Music Square♬

第242号

令和5年(2023) 9月6日(水)

Facebook,Twitterにも掲載／リンクフリー／御自由にコピーして下さい　令和2年(2020)4月10日創刊

発行・クッキー会　発行責任者・加藤良一

連絡先　rkato@max.hi-ho.ne.jp

埼玉県立川越高等学校音楽部 第73回 定期演奏会

現役生とOBで作り上げたステージ

創部73年の歴史を誇る**埼玉県立川越高校音楽部**の第73回定期演奏会が7月30日ウェスタ川越大ホールで開かれました。第4ステージでは、現役部員9名とOB 98名、計107人の合同による男声合唱が披露されました。最高齢は85歳でした。

委嘱初演の竹久夢二の詩による男声合唱組曲『**動かぬもの**』(上田豊貴作曲)他を現役生が演奏し、同高音楽部20回卒の作曲家**荻久保和明**氏による『**季節へのまなざし**』を、現役＋OBの「ALL KAWAGOE GLEE 2023」が作曲家自らの指揮で演奏しました。

コロナ禍くぐり抜け5年目にして実現！

この定演は、2018年に企画を立ち上げてから、5年の長い年月を経てようやく実現しました。参加したOBから後日熱いメッセージが機関紙〔A.K.G.通信〕に寄せられました。以下に紹介します。

・『季節へのまなざし』通称『きせまな』では、荻久保さんから暗譜必須のお達しがあり、かなり苦労した。
・本番に至るまでには多くの課題を克服し、パート内で世代を超えて会話をできるようになり、「音違っているよ」と気楽に言える状態を作ることができた。
・コロナ禍で活動ができなかった若手に、大観衆の前で大人数の男声合唱を経験してもらう良い機会となった。
・40回生は、現役のときに『きせまな』を歌っていない空白の世代だから、同期を誘っても歌えないと断られた。しかし、どうしても川高音楽部のメンバーで歌うことが大きなモチベーションとなった。
・本番のステージで荻久保さんが「このステージ上の誰もが、自分 の代が一番だったって信じてる」と言って笑いを誘っていたが、今回の活動を通して、違う世代の方たちとの交流がいかに楽しいかわかった。
・ALL KAWAGOE GLEE 2023は、男声合唱史に残るような素晴らしい演奏をやり遂げたと実感した。ステージ上から体感したあの響き、万雷の拍手は一生忘れることはない。
・「やらないで後悔するくらいなら、やって後悔しよう」の精神で、無茶を承知で参加した。
・現役の現状を実際に見て、触れて、高校の男声合唱の苦境を知り、川高音楽部も例外でなく厳しい状況にあると知った。その中、少人数でも切磋琢磨努力し、すばらしい音楽を奏でる現役の姿に感動した。
・優秀で素晴らしい指揮者・顧問を迎えて、新たな時代、歴史を作っていくことを応援しようと思った。世代が広がったが故のOB会運営の難しい状況も知り、現役世代のサポートと共に、OB間の橋渡しとしての役割、若返りや活性化にもしっかり関わっていきたい。

・OB会の目的は「現役支援」、財政面だけでなく、精神とか熱量とか魂とか、場面によっては、根性みたいな、「昭和世代」が好きそうな、だけど合唱には絶対欠いてはいけない目に見えないものを現役に伝えられた(と信じたい)ことが大きな収穫だったかもしれない。私たちOBにも、次に何かが始まるかもしれない、まだ目に見えないきっかけが芽生えているような気配もする。
・「きせまな」には川高音楽部をイメージした和音が存在した。「…ああ 彼方のむこうの 見知らぬ自分 自分のなかの 見知らぬ彼方」の部分は、「王道の和音を使い、川高音楽部を思いながら作りました」と荻久保先輩は話して下さった。
・過去には、NHK全国学校音楽コンクール第1位、全日

本合唱コンクール金賞受賞、100人以上いた時代もあったが、今は20人の生徒で仲間を信じあい、メンタルハーモニーの伝統を継承してくれている。これが、男声合唱人口増加の足掛かりになればと思っている。

・男声合唱界の人材供給源である川高音楽部の健在ぶりを示してくれた。

多くの男声合唱人を輩出 県立川越高校出身の落語家

県立川越高校はこれまでに数多(あまた)の男声合唱人を世に送り出してきました。そして、それぞれが所属団で重要な役割を果たしています。変わり種OBに**横山談らく**という落語家がいます。**談らく師匠**は川越の**男声合唱団イル・カンパニーレ**のメンバーで、演奏会では、企画・演出のリーダーを担っています。バラエティ系ステージが得意です。さらに最近**混声合唱団牧声会**にも入団しました。まさに「**歌う噺家**」です。

埼玉県立高校の男女共学化 どうなる高校の「男声合唱」

男子校として歴史と伝統のある**県立川越高校音楽部**においても近年の部員減少の悩みは尽きません。しかし、今回の定演で実現した多数のOBとの合同演奏は、明るい兆しの表れと捉えたいものです。

一方、8月30日埼玉では、県男女共同参画苦情処理委員(弁護士2名、大学教授1名)が「男女別学の県立伝統校の共学化」を勧告しました。勧告の内容は以下のとおりです。

申出の趣旨：埼玉県立の男子高校が女子が女子であることを理由に入学を拒んでいる事。女子の入学は当然認めるべきだ。女子差別撤廃条約に違反している事態は是正されるべきだ。

勧告の趣旨：「男女別学」は女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約上、男女別学であることだけでは条約違反とはされていないものの「男女共学」での教育が奨励されており、男女の役割についての定型化された概念の撤廃が求められている。埼玉県立高校の男女別学校における管理職や教職員の格差における問題が浮き彫りになっていることは明らかであり、別紙で提言した施策がなされるとともに、埼玉県立高校において、共学化が早期に実現されるべきである。

現在、埼玉県立高校137校のうち、男女別学は12校、全体の8.8%を占め、男子校は浦和(全日制・定時制)、春日部、川越、熊谷(全日制のみ)、松山の5校です。女子校は浦和第一女子(全日制・定時制)、久喜(全日制のみ)、春日部女子、川越女子、熊谷女子、鴻巣女子、松山女子の7校です。

勧告によれば、男女の役割についての定型化された概念の撤廃が求められているとし、早期の県立高校共学化の実現を求めています。

また、勧告では、男女別学の「注目すべき点」として、管理職・教職員の性別や設置学科などについて提示しており、2022年度の男子校における女性管理職はゼロなのに対し、女子校は管理職計25人のうち女性は8人で32%であることや、男子校にのみ「理数」分野の学科が設置され、女子校にのみ「家政」「外国語」分野の学科が設置されていることなどを問題視しています。

男女別学が続いてきた理由として各校の「歴史」や「伝統」について、「尊重されてしかるべきものである」としながらも、「公立学校における公共性を鑑みれば、性別に基づき異なった取り扱いをなすのは問題」、「尊重を伴いながらも共学化を進めることは何ら不可能なことではない」としています。秋田、宮城、福島、群馬、栃木、千葉においてはこれまでに共学化の推進がなされており、秋田、宮城、福島はすでに男女別学校は廃止されており、群馬、栃木、千葉においても数校はまだ残ってはいるものの、共学化を推進するという方針には変わりないと説明しています。

埼玉でも男女共学化が進むか！

勧告を受けて日吉亨埼玉県教育長は8月31日、「男女共同参画に関する教育推進は大変重要。社会状況の推移を踏まえた教育を実施する観点から十分検討する」とのコメントを発表しました。共学化を巡る問題は、以前も別学解消などを求める苦情申し出があり、苦情処理委員は2002年に県立高校の共学化早期実現を勧告しましたが、一律共学化に反対する署名約27万人分が知事に提出され、検討した県教委も2003年に「早期に共学化を実現するという結論には至らなかった」と回答した経緯があります。

男女別学校の共学化が合唱活動に及ぼす影響については、埼玉のみならず全国的な問題です。ぜひご意見をお寄せください。

この問題について、埼玉のある男子校のOBは「共学化については、反対の気持ちはありません。それによって男声合唱が減ることがないように、魅力的な世界であることをさらに拡げたいところです。同じ学校の中に女声・男声・混声と合唱にはまる子供たちが増えることが理想ですね」と前向きに捉えていました。